散髪の後

猫の葬式引き連れて
１２月の穏やかな大気の中へ
クラリネットの音は消え入るかのようだ

顔をあげれば眼鏡のレンズの塵が
ボルテックスのようにまん丸く
透きとほって見えるのです

感じることの哀しみと幸福を
僕は何にもまして愛していたし
全てはただそのためにのみあったのだ

車を洗うホールから散る水は
そんな陽光の中に消え入った
まるでその夢のように・・・

永遠の眠りについたはずの猫は
消えかけたその身体をむっくり起こし
超絶技巧のドナウ・ワルツに踊りだす

そしてその手には
どうして握れるのか不思議だが
白い歯ブラシまでがあるのだった

その時、ふっとなびいた風が
その葬列を吹き消して
あとはただ充溢する陽光、陽光、陽光・・・

僕は歩き続けていたのではあったが
何か感動などというものは忘れ去ってしまっていたし
そのまま歩き続けるだけだった

(1989.12.16)